紀　　要

第 11 号

目　　次

序

近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き……（瀬　口　眞　司）
－地域の検討１．湖東北部地域－

近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き……（小　島　孝　修）
－地域の検討２．湖東南部地域－

櫛の造形　－縄文時代の竪櫛－……（中　川　正　人）

滋賀県における弥生時代の石鏃の変遷についての素描……（田井中　洋　介）

今津妙見山古墳にみる古墳の築造と葬送手順の一例……（横　田　洋　三）

古墳時代における琵琶湖およびその周辺地域……（細　川　修　平）

長浜市石田町所在の石棺について……（北　原　　治）

観音寺山南麓における横穴式石室墳の一例……（辻川哲朗・山中　繁）
－蒲生郡安土町石寺所在谷川筋古墳群の調査－

蒲生郡の渡来氏族とその文化……（大　橋　信　彌）

草津市笠山古窯出土遺物の紹介（続）……（畑　中　英　二）
－窯詰めの方法の復元について－

森瓦窯再考　－「田原道をめぐる二つの地域」補遺－……（重　岡　　卓）

近江式装飾文よりみた小形板碑の年代……（兼　康　保　明）

１９９８．３

財団法人滋賀県文化財保護協会

近江式装飾文よりみた小形板碑の年代

兼　康　保　明

1．はじめに

近江各地に、無数といってよいほどある小形板碑や四柱の屋根形をもつ小形石仏（広義には小形板碑に分類して良いものであろう）は、これまで小形塔ゆえに退化形式の石塔として、室町時代後期のものとして一括して編年されてきた。しかし、小形塔ゆえ、あるいは退化形式ゆえに室町時代後期とする編年基準は、あまりにも一元的である。例えば、石仏としてその像容をみた場合、室町時代後期より古そうにみえるものも決して少なくない。「石造美術の宝庫」と言われ、優れた研究や調査報告のある近江ではあるが、こうした小形板碑や小形石仏の研究については、ほとんど手が着けられていない。その理由は、北大和や南山城の小形板碑にみられるような、在銘資料がほとんど無いことも大きな要因である。もちろん紀年銘は無くとも、他地域での編年や研究を参考に、個々の計測値や像容の形式等の検討から、ある程度の年代の推定は可能である。しかし、労多くして、実りの少ない仕事であるだけに、なかなかそれに打ち込むには勇気がいる。

私は、蒲生郡日野町蔵王産の「米石」と通称される花崗岩を用いた、中世石造美術の調査を進めていく過程で、鎌倉時代後期から室町時代までの近江式装飾文、とりわけ三茎蓮文の顕著な変化に気がついた。そこで「米石」製の小形板碑や小形石仏の中にも、まれに三茎蓮文をもつものがみられることから、小形塔とはいえ、それについても当然時代による三茎蓮文の変化が反映しているのではないかと考えた。そこでこの点に注目して、小形板碑や小形石仏の年代の一端を推定してみたのが小論である。

この方法論については、小形塔にあまり注意をはらわなかった田岡香逸氏も、石塔寺境内にある上端を四柱の屋根形に造った小形石仏の報告で、奇しくも石仏の造立年代を推定するにあたり、最もよりどころになるものは、三茎蓮文の形式であると述べている。[(1)]

2．小形板碑の年代検討の契機

三茎蓮文のある小形板碑の年代観を検討しようとしたのは、神崎郡永源寺町高木の浄福寺境内墓地にある阿弥陀一尊石仏(13)の、田岡氏の年代観に疑問をもったからである。田岡氏はその報告[(2)]の中で、この小形石仏の年代決定の過程を示してくれている。それを要約すれば、この小形石仏は、三方の屋根の流れが全体に軽く反転すること。身部の彫り込みが目立って深いこと。尊像が肉厚に刻出されていること。格狭間の形式が整っていることなどから、手法に南北朝式が認められるとしている。しかし、日野町西明寺に多くみられる同形式の小形板碑や小形石仏を室町時代中期末から後期初頭(1530年頃)に編年すると、[(3)]浄福寺例１例を単に手法から南北朝時代にみると、その中間の過途的な形式が無いことを疑問としてあげられている。さらに蓮華座が長方形の台座状に造られ、十一弁を刻出していることなどは、まったくの退化形式と考えた。さらに、構造形式がほとんど同じこと、小形化が徹底したものであることなどから、手法の古さを加味しても、一般的な小形板碑や小形石仏より若干年代が遡る程度――つまり1520年頃のものと考えた。そして、小形板碑や小形石仏としてはやや先駆的な作品であり、細部がていねいに造られたため、一部の手法に古式を残したと結論づけている。

確かに、新しい時代のものに古い手法を残す例は、石造美術にはしばしば認められる。また、いかに古い要素を多く指摘できたとしても、例え一つでも新しい年代決定の要素を含んでいれば、それは新しくみなくてはならない。しかし、本例に関して言えば、田岡氏が新しい要素とみたものが、必ずしも決定権をもつだけの要素でないように思われる。

そこでこの場合、すでに宝塔や宝篋印塔などで確認できている三茎蓮文の形式が、最もよりどころとなろう。三茎蓮文の編年という点からみれば、決して同形式の文様が――例えば、南北朝時代後期の文

様が、室町時代後期まで、百年も時代を隔てて存在することは認められない。南北朝時代末期～室町時代初期の1400年前後の文様と、室町時代中期～後期の1520～30年頃の文様ではあまりにも意匠が違いすぎるのである。

次に小形化が、必ずしも年代決定の要因にならないことは、田岡氏自ら蒲生郡蒲生町石塔の石塔寺境内にある阿弥陀一尊石仏(1)で証明している[(4)]。それゆえ、小形化した板碑や石仏が、必ずしも室町時代後期の所産であることを意味しない。

このように考えて行くと、浄福寺境内墓地の阿弥陀一尊石仏(13)の三茎蓮文の編年が示す時期は、南北朝時代後期から室町時代前期の1400年を前後する時期であり、逆に田岡氏が石仏の像容などから指摘した南北朝式とみた手法を生かすうえでぴったりするのである。

こうした三茎蓮文の編年より石造美術の年代をみる方法は、逆にこれまで年代の決定が主観的な要素に頼っていた小形板碑や小形石仏に、編年の基準資料を提供することにもなる。三茎蓮文をもつ小形板碑を基準資料に、構造形式やそこに刻出された尊像、石塔の形式変化をとらえることが十分可能である。

3．三茎蓮文をもつ小形板碑・小形石仏の諸例

それでは、これまでに報告されている三茎蓮文をもつ小形板碑や小形石仏についてみてみよう（順不同）。

(1). 蒲生郡蒲生町石塔・石塔寺境内

（文献・田岡香逸「続近江蒲生町の石造美術（後）」『民俗文化』179　滋賀民俗学会　1978年　1701頁）

総高66.5cmの阿弥陀一尊石仏で、上端は四柱の屋根形を造っている。蓮華座上に定印の阿弥陀座像を刻出。その両側に、向って左に交叉二茎蓮、右に三本川式三茎蓮を配している。三茎蓮文の中央の直立した茎には、開花をつける。二茎蓮、三茎蓮共に、宝瓶を伴うが、宝瓶は特徴的な外反する長い頸部をもっており、体部は肩部までしか表現していない。葉は大振りで、各々の構図は、左右対称である。また、共に全体が尊像に向って、傾き気味に刻出されている。

田岡氏はこの報告で、石仏の造立年代を推定するにあたり、最もよりどころとなるものは、三茎蓮文の形式であると述べている。そして三本川式三茎蓮の比較から嘉元頃（1350年頃）の造立と推定している。

現物を確認しておらず、石材については不明。田岡報告では花崗岩。

(2). 蒲生郡日野町西明寺1

（文献・田岡香逸『近江の石造美術』3　民俗文化研究会　1976年　121～122頁）

総高46cmの阿弥陀一尊石仏で、上端は四柱の屋根形に造っている。蓮華座上に定印の阿弥陀座像を刻出。さらにその下の平面に、横長の矩形の輪郭を線刻し、内に三茎蓮文を配している。

宝瓶三茎蓮文は、中央の蕾をつけ直立した短い茎を挟むように、左右に相対する二茎が、中途から外側やや下向きに曲がり、葉もやや下向きについている。

田岡氏は、室町時代も1535年頃の造立と推定している。

現物は確認しておらず、石材については不明。田岡報告では花崗岩。

(3). 蒲生郡日野町西明寺2

（文献・(2)に同じ　123頁）

総高76.6cmの宝篋印塔板碑で、先端を山形に切り、肩に一線を刻むと共に、山形にも横に四線をほぼ等間隔に刻む。宝篋印塔は輪郭内いっぱいに薄肉彫りしている。その宝篋印塔の基礎は壇上積式に造り、その中に三茎蓮文のみを配する。さらに、以下の根部に蓮華座を線刻している。

田岡氏は(2)の石仏同様、室町時代も1535年頃の造立と推定している。石材は、蔵王産の細粒黒雲母花崗岩（米石）である。

(4). 蒲生郡日野町蔵王・寂照寺境内地蔵堂

（文献・兼康保明「寂照寺の石造美術・補遺－蒲生郡日野町蔵王－」『民俗文化』415　滋賀民俗学会　1998年）

総高45.2cmの阿弥陀一尊石仏で、上端は四柱の屋根形に造っているが、屋根に板碑の額部同様、三線をほぼ等間隔に刻む。蓮華座上に定印の阿弥陀座像を刻出。さらにその下の平面に、横長の矩形の輪郭

三茎蓮文をもつ小形板碑・小形石仏（縮尺不同）

を線刻し、その中に格狭間を彫り込み、さらに宝瓶三茎蓮文を配している。

三茎蓮文は、中央の蕾をつけた直立した茎を挟むように、左右に相対する二茎が、向って右の茎は中途から右に曲がり、葉も外側についている。左の茎は中途からU字状に曲って上向きにのび、上向きの葉をつけている。

底部には、直径4.6㎝、長さ3.1㎝の枘があることから、基礎の上に立てられていたことがわかる。

石材は、蔵王産の細粒黒雲母花崗岩（米石）である。

(5). 蒲生郡日野町蔵王・寂照寺墓地1

（文献・(4)に同じ）

総高77.5㎝（基底部がセメントで固められているため、計測不可）の宝篋印塔板碑で、上端は四柱の屋根形に造っているが、屋根に板碑の額部同様、三線をほぼ等間隔に刻む。宝篋印塔は輪郭内いっぱいに0.6～0.8㎝の厚さで薄肉彫りしている。宝篋印塔各部のうち、笠と相輪、塔身、基礎は、互いにその境を彫って、独立して表現している。笠の隅飾りは、上部の長い二弧輪郭付きで、基礎は壇上積式に造るなど、忠実に模している。基礎側面には、退化三茎蓮文のみを配する。さらに、以下の根部に蓮華座を線刻している。

三茎蓮文は、中央の蕾をつけた直立した短い茎を挟むように、左右に相対する二茎が、共に内側にワラビ手のように円弧を描き、巻き込んだ小さな葉は下方を向く。

石材は、蔵王産の細粒黒雲母花崗岩（米石）である。

(6). 蒲生郡日野町蔵王・寂照寺墓地2

（文献・(4)に同じ）

総高70.6㎝（基底部がセメントで固められているため、計測不可）の宝篋印塔板碑で、先端を山形に切り額部を造るが素面。宝篋印塔は輪郭内いっぱいに0.5～0.8㎝の厚さで薄肉彫りしている。笠の下端幅や基礎の上端幅に対して塔身の幅が目立って狭い。笠の隅飾りは、三弧輪郭付きで、基礎は壇上積式に造っている。基礎側面には、格狭間を彫り、その中に三茎蓮文を配する。

三茎蓮文は、中央の蕾をつけた直立した短い茎を挟むように、左右に相対する二茎が、共に内側にワラビ手のように円弧を描き、巻き込んだ小さな葉は下方を向く。中央の茎は、左右の茎よりも短く、左右の葉はさらに退化して膨らみでしかない。

石材は、蔵王産の細粒黒雲母花崗岩（米石）である。

(7). 蒲生郡日野町別所・盛願寺

（文献・田岡香逸『近江の石造美術』3　民俗文化研究会 1976年 124頁）

総高51㎝の二尊石仏で、上端は四柱の屋根形に造っている。輪郭内に二体の定印の阿弥陀座像を刻出。さらにその下の平面に、直接格狭間を彫り込み、その中に宝瓶三茎蓮文を刻出する。

三茎蓮文は、中央の蕾をつけた直立した短い茎を挟むように、向って右の茎は外反し、外側やや下方に曲がり、葉もやや下向きについている。左の茎はわずかに直立してから外側に曲り、さらに内側に向ってUターンし、内向きの葉をつけている。格狭間は茨が形骸化する。

田岡氏は、室町時代も1545年頃の造立と推定している。

石材は、蔵王産の細粒黒雲母花崗岩（米石）である。

(8). 蒲生郡日野町中山西・金剛定寺

（文献・田岡香逸「近江の石造美術補遺3－獅子文と組紐式三茎蓮－」『民俗文化』244　滋賀民俗学会 1984年 2595頁）

総高35.5㎝の五輪塔板碑で、先端を山形に切り、額部を造るが素面。輪郭の中に五輪塔を刻出する。輪郭に接して、その下に格狭間を彫り、その中に宝瓶三茎蓮文を刻出している。

三茎蓮文は、中央の蕾をつけた直立した短い茎を挟むように、左右の二茎が中途から同一方向に曲り、葉は横向きについている。格狭間は退化し、茨は一個である。

田岡氏は、小形化が徹底した退化形式であることから、室町時代も1550年頃の造立と推定している。

石材は、蔵王産の細粒黒雲母花崗岩（米石）である。

(9). 日野町音羽・会議所地蔵堂1

（文献・田岡香逸「近江日野町の石造美術－音

羽地蔵堂・村井信楽院・大窪大聖寺ー」『民俗文化』159　滋賀民俗学会　1976年 1454～1456頁

兼康保明「三茎蓮文をもつ小形板碑の再検討ー蒲生郡日野町ー」『民俗文化』376　滋賀民俗学会

1995年)

総高50.0㎝の五輪塔板碑で、上端は四柱の屋根形に造り、輪郭の中に五輪塔を刻出する。輪郭に接して、その下に格狭間を彫り、その中に退化した宝瓶三茎蓮文を刻出している。

三茎蓮文は、中央の蕾をつけた直立した短い茎を挟むように、左右に相対する二茎が、共に右方向にワラビ手のように円弧を描き、巻き込んだ小さな葉は左下方を向く。

石材は、蔵王産の細粒黒雲母花崗岩（米石）である。

⑽. 日野町音羽・会議所地蔵堂２

（文献・(9)に同じ）

総高56.8㎝の五輪塔板碑で、上端は四柱の屋根形に造り、輪郭の中に五輪塔を刻出する。輪郭に接して、その下に格狭間を彫り、その中に退化形式の三茎蓮文を刻出している。

三茎蓮文は、中央の直立した短い茎を挟むように、左右に相対する二茎が、共に右方向にワラビ手のように円弧を描き、巻き込んだ小さな葉は左を向く。格狭間は退化し、茨は一個である。

石材は、蔵王産の細粒黒雲母花崗岩（米石）である。

⑾. 日野町音羽・会議所地蔵堂３

（文献・(9)に同じ）

総高49.5㎝の五輪塔板碑で、先端を山形に切り、額部を造るが素面。輪郭の中に五輪塔を刻出する。輪郭に接して、その下に格狭間を彫り、その中に三茎蓮文を刻出している。

三茎蓮文は、中央の直立した短い茎を挟んで、左右に相対する二茎が、共に外側に大きく外反し、退化した小さな葉は下方を向く。

石材は、蔵王産の細粒黒雲母花崗岩（米石）である。

⑿. 甲賀郡土山町鮎河・黒河家墓所

（文献・田岡香逸「近江土山町の石造美術(前)ー鮎河と黒川ー」『民俗文化』164　滋賀民俗学会　1977年　1518頁）

総高33㎝の五輪塔板碑で、上端を平入りの四柱形に造り、棟部を造らない。輪郭の中に五輪塔を刻出する。輪郭に接して、その下に格狭間を彫り、その中に三茎蓮文を刻出している。

三茎蓮文は、中央の蕾をつけた直立した短い茎を挟むように、左右に相対する二茎が、共に内側にワラビ手を描き、先端に斜め下方を向いた小さな葉をつける。

田岡氏は特に年代は示していないが、室町時代の最も小形化が徹底したものとしている。

石材は、蔵王産の細粒黒雲母花崗岩（米石）である。

⒀. 神崎郡永源寺町高木・浄福寺境内墓地

（文献・田岡香逸「近江湖東の石造美術(後)ー高木・和南・妹・寺町ー」『民俗文化』136　滋賀民俗学会　1975年　1162頁）

総高47㎝の阿弥陀一尊石仏で、上端は四柱の屋根形に造っている。屋根の正面は素面。三方の屋根の流れが全体に軽く反転する。身部の彫り込みは目立って深い。蓮華座上に定印の阿弥陀座像を配するが、尊像は肉厚に刻出されている。蓮華座は十一弁で、その幅はほぼ内部いっぱいまで造る。さらにその下の平面には、横長の矩形の輪郭を線刻し、その中に整った格狭間を彫り込み、さらに宝瓶三茎蓮文を配している。

三茎蓮文は、中央の蕾をつけた直立した茎を挟むように、左右に相対する二茎が、向って右の茎は中途から外側やや下向きに曲がり、葉もやや下向きについている。左の茎は中途からU字状に曲って上向きにのび、上向きの葉をつけている。

石材は、蔵王産の細粒黒雲母花崗岩（米石）である。

4．三茎蓮文をもつ小形板碑の年代の検討

日野町を中心に、隣接する蒲生町、永源寺町、土山町に分布する三茎蓮文をもつ小形板碑の年代について検討してみたい。

宝瓶三茎蓮文の検討　　三茎蓮文の形式から最も

古く位置づけられる小形板碑は、蒲生町石塔の石塔寺境内(1)の阿弥陀一尊石仏である。この石仏の三茎蓮文については、蔵王の石工の手になると考えている三茎蓮文と宝瓶の形が異っている。蔵王の石工の作る宝瓶三茎蓮文は、宝瓶が短頸で肩が丸味をもつのに対して、ここではやや長い頸部と、肩部の最大径が口径より小さい。現物は未確認であるが、三茎蓮文の形式からみて、蔵王以外の石工の作[5]で、石材も「米石」ではないと推定される。田岡氏は、右側に配された三本川式三茎蓮の比較から、嘉元頃(1305年頃)の造立と推定している[6]。

田岡氏の編年観とは別に、三茎蓮文をもつ小形板碑や小形石仏の中では、近江式装飾文を複数配したり、細部の葉が大振りであることなど、文様としての古い要素を多く有している。こうした点からみても、形式的には近江式装飾文をもつ小形板碑や小形石仏の中では、最も古いものと位置づけてよいだろう。註(6)で私案を示したように、田岡氏よりもやや時期的に新しくみるものの、14世紀第1四半期より新しいものではない。

蔵王の石工の手になる、短頸で肩が丸味をもつ特徴的な宝瓶の三茎蓮文は、日野町西明寺の阿弥陀一尊石仏(2)、同町寂照寺地蔵堂の阿弥陀一尊石仏(4)、同町盛願寺の二尊石仏(7)、同町金剛定寺の五輪塔板碑(8)、永源寺町浄福寺の阿弥陀一尊石仏(13)の5例であるが、退化して短頸部は無いに等しい。これよりもさらに宝瓶が形骸化したものとして、日野町音羽会議所地蔵堂の五輪塔板碑(9)がある。この内、寂照寺地蔵堂(4)、盛願寺(7)、浄福寺(13)の3例は同形式の三茎蓮文である。この3例を、三茎蓮文の変化という点からみるならば、寂照寺地蔵堂例(4)が文様として一番しっかりしている。各三茎蓮を比較すると、寂照寺地蔵堂例(4)では中央の茎が長く、左右の曲った茎の最高部より僅かに高いが、盛願寺例(7)では中央の茎が、左右の曲がった茎の最高部より高いものの、中央の茎自体が短くなっている。浄福寺例(13)も盛願寺例(7)と同様である。

寂照寺地蔵堂例(4)、盛願寺例(7)、浄福寺例(13)の同形式の3例に対して西明寺例(2)は、三茎蓮の左右の茎が下方に伸びて、葉は斜め下方を向いたシンプルなものである。単純化した文様のため一見退化しているように見えるが、宝塔や宝篋印塔のような大形塔に施された文様で見る限りでは、文様の形式としては先の3例より古いものである。

一方、金剛定寺例(8)では、宝瓶はより扁平になって退化し、三茎蓮も左右の茎が、同一方向に曲がり、これまでの蔵王の三茎蓮パターンとは異ったもので、先にみた西明寺、寂照寺地蔵堂、盛願寺、浄福寺例などよりも後出的な形式の文様である。ただ、宝瓶が退化してかろうじて痕跡をとどめるだけの音羽会議所地蔵堂例(9)の三茎蓮と方向は違うが共通する。しかし、音羽会議所地蔵堂例(9)のように左右二茎がワラビ手になっていない点は、退化したといえども金剛定寺例(8)の方が古い要素を残している。

格狭間についてみると、寂照寺地蔵堂例(4)では、格狭間は小さいながらもきちんと茨の形をとどめており、茨が崩れる寸前の形式である。盛願寺例(7)や浄福寺例(13)も茨に鋭さがないがかろうじて茨の形を残している。それに対して、金剛定寺例(8)や音羽会議所地蔵堂例(9)では、格狭間は完全に形骸化してしまっている。三茎蓮文でも格狭間で比較しても、新旧は共通している。

最後に各三茎蓮文の年代について検討してみよう。

寂照寺地蔵堂例(4)、盛願寺例(7)、浄福寺例(13)は同形式の三茎蓮文をもつが、同じ三茎蓮文の例は宝篋印塔では日野町蓮華寺の信楽院例(『近江の石造美術』3　69)や、土山町鮎河の黒河家墓所・21、同所今井家墓所・28[7]などにみられる。宝篋印塔の場合は、文様だけでなく基礎比率などを勘案すれば、さらに先後が分類可能である。この形式の文様使用の相対年代としては、概ね1400年頃を上限に、15世紀第1四半期の中に編年できるものである。製作順としては、寂照寺地蔵堂例(4)が同形式の文様の中では最も古く14世紀末頃、続いて盛願寺例(7)が15世紀初頭に、最後に浄福寺例(13)が15世紀前半頃に位置づけられよう。

西明寺の阿弥陀一尊石仏(2)の三茎蓮文は、格狭間が無いため比較要素が文様だけに限定される。三茎蓮文の左右の葉が対象的に配され、葉が斜め下方を向いた同形式の文様は、14世紀第1四半期からみ

られるが、中央の直立した短い茎の蕾が小さいことや、左右の葉が小さくかつ形骸化している様は、その形式の中でも後出的要素である。同形式の文様でも、日野町音羽の雲迎寺にある貞和5年(1349)銘の宝篋印塔（『近江の石造美術』3　48）では、左右の葉は完全に下方を向いており、西明寺例(2)の三茎蓮文は、小品ではあるがそれより先行するものである。類例としては、日野町小谷の宗福寺（『近江の石造美術』3　43）の宝篋印塔の文様が最も近いが、宝瓶が形骸化している分だけ西明寺例(2)の方が新しいだろう。宗福寺例は無銘であるが、基礎比率などからみて14世紀第2四半期も1330年頃に比定されているものである。こうしたことを勘案すれば、西明寺例(2)はおそらく14世紀第2四半期の1330～1350年頃までのものと考えられよう。

日野町金剛定寺の五輪塔板碑(8)の宝瓶三茎蓮は、かなり宝瓶が退化してきているが、まだ宝瓶を明瞭に残している。さらに形式的に退化した、ワラビ手のように変形した三茎蓮文では、ほとんど宝瓶の形なしていないため、おそらく蔵王の宝瓶三茎蓮の最後の資料の一つであろう。同形式の三茎蓮文としては、日野町佐久良の仲明寺（『近江の石造美術』3　75）、土山町瀬音の清涼寺[8]などの宝篋印塔にもみられるが、宝瓶を表現していると言う点では、本例のみであることから、同形式の三茎蓮文中では最も早いものであろう。形式としては寂照寺地蔵堂(4)、盛願寺(7)、浄福寺(13)例などに見られる三茎蓮文に続くものである。本例と同形式の三茎蓮文は、すでに宝瓶が完全に退化し、左右の茎もワラビ手化したものに、形態や基礎比率などの比較から1500年頃の年代が与えられることから、先行形式との関係で、15世紀の第2四半期～第3四半期頃の年代が推定される。

退化三茎蓮文の検討　　次に三茎蓮がワラビ手化した、日野町蔵王の寂照寺墓地(5、6)、同町音羽の会議所地蔵堂(9～11)、土山町鮎河黒河家墓所(12)の退化三茎蓮文についてみてみよう。

この形式の三茎蓮文は、宝篋印塔でも在銘資料が無く、文様と基礎比率で前後関係を把握している程度である。小形板碑といえども、三茎蓮が忠実に描かれているなら、逆に板碑ゆえに三茎蓮以外にも比較要素があり、かえってこれまで宝篋印塔ではわからなかった、あるいは検証できなかった形式の前後関係をとらえることができる。

退化三茎蓮文の中で早い時期のものは、音羽の会議所地蔵堂(9、10)例で、その先行形態として先にみた金剛定寺の五輪塔板碑(8)がある。(10)については、土山町鮎河黒河家墓所の宝篋印塔・22に類例があり、この宝篋印塔の格狭間は茨が三つに退化しており、五輪塔板碑(10)の格狭間と共通する。(9)と(10)について比較すると、(9)にはわずかに宝瓶の痕跡があることや、格狭間が(10)ほど退化していないことなどから、あまり時間差はないが(9)が(10)に先行するものと思われる。

次に日野町蔵王寂照寺墓地にある、2基の宝篋印塔板碑(5、6)を比較してみよう。(5)の板碑にみられる三茎蓮文は、これまで蒲生町上麻生の法雲寺にある宝篋印塔の基礎[9]以外、類例が知られていなかったものである。しかも法雲寺例でも(5)と同様格狭間が無く、それゆえに、この形式の文様は基礎比率以外、他の退化三茎蓮と比較できるものがなかった。しかし、板碑として同じ墓地にある(6)と比較すると、(5)では頭部は四柱の屋根形ながら、屋根の正面に板碑の額部同様、三線を刻んでいる。また、根部には蓮華座が線刻されている。それに対して、(6)では頭部は山形でありながら素面であり、根部も素面のままで、細部に簡略化の跡がみられる。このことから、板碑としてみれば、形式的には(5)は(6)に先行するものであろう。(5)と同形式の線刻蓮華座を根部にもつ、日野町西明寺の宝篋印塔板碑(3)では、頭部は山形であるが肩に一線、さらに頭部に三線が刻まれており、同形式の宝篋印塔板碑としては、(6)より古くみて良いだろう。(5)と比較すると、(3)のような三茎蓮は例がないことから、三茎蓮の文様では比較できない。ただ額部については、(5)では屋根の傾斜のように後方へ傾斜しているのに対し(3)では平坦なことから(3)の方が後出的ではなかろうか。

最後に音羽の会議所地蔵堂例(11)についてみてみると、やはり土山町鮎河黒河家墓所の宝篋印塔・22、23に類例があるが、本例の方が茎のつくりが太く、中央の蕾と左右の茎の最高点があまり違わないのに

対して、黒河氏墓所のものは左右の茎より中央の蕾が短いなど多少の差異が認められる。

年代については、退化三茎蓮文の編年が宝篋印塔でも確定しておらず、おそらく文様の前後関係から推定して、1500年前後を中心とする15世紀後半～16世紀前半の中におさまるのではないだろうか。

5．結　語

以上の検討から、三茎蓮文をもつ小形板碑や小形石仏で最も古いものは、交叉二茎蓮と三本川式三茎蓮をもつ蒲生町石塔寺境内例（1）で、14世紀前半まで遡ることが確認された。しかし、ここにみられる三茎蓮文は蔵王の石工によるものではないことから、小形板碑や小形石仏に三茎蓮文をつけるアイデアは、蔵王以外の石工によって生み出されたものである。ただし、現状ではそれ以降の三茎蓮文を持つ小形板碑や小形石仏には、逆に蔵王産の「米石」以外に無いことから、石塔寺境内例（1）以後はこのアイデアは、蔵王の石工に引き継がれたもののようである。最初に三茎蓮文を有する小形石仏を造立させた背景を考えると、以後「米石」以外のものに三茎蓮文が無いこと。当該小形石仏が鎌倉時代後期から南北朝時代の「米石」製石造美術の分布圏——すなわち蔵王の石工の石造文化圏内にあることから、次のようなことが推定されはしないだろうか。すなわち、石塔寺境内の小形石仏が、原位置を動いていたとしても、そう遠い距離から持ち運ばれたものでないと仮定すれば、宝塔や宝篋印塔の基礎を近江式装飾文で飾ることを好んだ、蒲生郡内の造立者の意向を反映したものということになる。そのため、それ以降は三茎蓮文をもった小形板碑というアイデアは蔵王の石工に引き継がれ、意匠としては蔵王独自のものに変わっていったのではないだろうか。

蔵王の石工が三茎蓮文をもつ小形板碑や小形石仏などを製作するようになるのは、石塔寺境内例（1）より20～30年遅れて日野町西明寺の阿弥陀一尊石仏（2）からで、数こそ宝篋印塔などのように多くはないが、続いて14世紀末頃と推定される日野町寂照寺地蔵堂の阿弥陀一尊石仏（4）、日野町盛願寺の二尊石仏（7）、永源寺町浄福寺の阿弥陀一尊石仏（13）——このあたりまでが、南北朝式の三茎蓮文をもつものである。次に、南北朝式の三茎蓮文の末期のものとして、日野町金剛定寺の五輪塔板碑（8）が1500年頃と、順に三茎蓮文の編年で追うことができる。このことによって、田岡氏が「小形石仏に南北朝期の過途的な形式が無い」と疑問視した問題は解決できる。おそらく、これまで気がつかなかっただけで南北朝時代中・後期の、三茎蓮文をもたない小形石仏や小形板碑も、多く存在するはずである。これ以降になると、宝篋印塔の基礎にみられる三茎蓮文同様、三茎蓮がワラビ手のように退化し、室町式の退化三茎蓮文となる。最終末のものについては、宝篋印塔の三茎蓮文の編年でも、末期のものの年代が十分把握されていないため判定は難しいが、おそらく16世紀中頃を下るものではないであろう。

最後に、小形石仏や小形板碑であっても、三茎蓮文を通して編年の基準資料となる可能性があるのではないかということを問題提起し、紹介した13例の資料の製作順と、現時点での推定年代を記して結論としたい。

（1）（1310～15年頃）→（2）（1330～50年頃）→（4）・（7）・（13）（1385～1440年頃）→（8）（1440～75年頃）→（9）・（10）（1480～1520年頃）→（5）・（6）・（12）・（3）→（11）（～1550年頃まで）

（1997.12.12．於逢坂山麓水蓮洞）

註

(1) 田岡香逸「続近江蒲生町の石造美術（後）」（『民俗文化』179　滋賀民俗学会　1978年）

(2) 田岡香逸「近江湖東の石造美術（後）－高木・和南・妹・寺町－」（『民俗文化』136　滋賀民俗学会　1975年）

(3) 田岡香逸「板碑」（『近江の石造美術』3　民俗文化研究会　1976年）

(4) 註(1)に同じ。

(5) 蔵王の石工の作品の特徴については、下記の論考で紹介した。

兼康保明「田岡香逸「近江蔵王の石造文化圏　付　石大工平景吉の系譜とその作品」の検討と再評価」（『民俗文化』353　滋賀民俗学会　1993年）

(6) 蔵王の三茎蓮の構造から言えば、左右の葉が横を向いているものは、斜め下方を向くものと共に、葉が下方を向くものより古い。また、三茎蓮、二茎蓮共に明瞭に茎が屈曲していない点も、意匠としては古いものである。

この小形石仏と同系統の石工の作品が把握できていない

が、蔵王の近江式装飾文の変化でみるならば、茎の明瞭な屈曲が1320年頃に認められることから、それ以前のものであることは確実である。また、蔵王での二茎蓮文（日野町佐久良の仲明寺宝篋印塔。『近江の石造美術』３で、田岡氏は1295年頃とする）の登場が、私案では14世紀第１四半期の1305～10年頃を考えている。そうしたことから、この小形石仏は田岡編年よりやや新しく、14世紀第１四半期も後半の1310～15年頃の作品と見て良いのではないだろうか。蔵王以外の石工による近江式装飾文の編年が明確ではない現状での、暫定的な私案としてあげておく。

(7) 田岡香逸「近江土山町の石造美術（前・中・後）－鮎河と黒川－」（『民俗文化』164～166　滋賀民俗学会　1977年）

(8) 兼康保明「清涼寺の石造美術－甲賀郡土山町瀬ノ音－」（『民俗文化』368　滋賀民俗学会　1994年）

(9) 田岡香逸「近江蒲生郡の石造美術－蒲生町上麻生と日野町中在寺・安部居・村井－」（『民俗文化』219　滋賀民俗学会　1981年）

(10) 兼康保明「石塔から見た蒲生野－蒲生町を中心に－」（『Tea Timeオリジナル』67　1994年）

※　図版の出典は、田岡香逸および兼康保明の各報告による。

編集後記

『紀要』第11号を発行することができました。紀要の創刊は、昭和63年３月なので本号でちょうど10年を迎えることとなります。初心を忘れることなく続けていきたいと思っております。

前号より、本文は２段組となり量的に若干の余裕ができ、本号には各時代にわたって12本の論考を掲載することができました。つきましては、多くの方々からご叱正とご指導を賜れば幸いです。　（K．O）

平成10年３月

紀　要　第１１号

編集・発行　財団法人　滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(077)548-9780・9781

印刷・製本　冨士出版印刷株式会社
大津市札の辻４－20
Tel(077)523-2580 Fax(077)524-6668

8923　K
滋賀県文化財
保護協会蔵書印　440